

原 著

実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向

—ピアサポート／仲間支援活動の起源から現在まで—

西山 久子 (岡山学芸館高等学校) 山本 力 (岡山大学教育学部)

私たちの社会では、習慣的に仲間支援の手法が用いられてきたが、近年、「ピアサポート」が学校教育現場に実践的に導入され、欧米で開発された技法なども紹介されて仲間関係を積極的に活用しようという動きがある。福祉の領域などでは、より積極的に仲間支援が行われ、歴史的に見ても教育・福祉等の分野で活用してきた経緯がある。そうした支援は、相談活動、葛藤調停、仲間づくり、アシスタント、学習支援、指導・助言、グループリーダーの7項目に分類される。学校で生徒がもつ仲間支援の力が十分活用するようにプログラムが構成されるとき、生徒らにとって有効なピアサポート活動が実施できる。

キーワード：ピアサポート、仲間、仲間支援、ピアカウンセリング、ソーシャルサポート

I. 問題の所在と背景

学校教育現場では、児童生徒らの「生きる力」(文部省, 1998)を育てるための取り組みが奨励されている。それを達成するために、新しい様々な試みがなされており、体験を通して実践的に学ぶことの必要性が指摘されている。それに応じて「心の教育」も実践的な方法論が求められているのも事実である。

こうした状況の中で、ピアサポートおよび仲間支援がひとつの運動として教育現場で行なわれ始めている。欧米で開発、実践されているものが、日本に取り入れられ、いくつかの実践報告がなされている。しかし、全く異なる文化の中では、様々な不応があることが指摘されている(西山, 2001)。その一方、日本で教育者が習慣的に行なってきた仲間を活用した支援もある。

そこで、これらの既存の支援活動や日本に入りつつある仲間支援を概観することで、何らかの知見が得られないかと考え、現在、日本で活用されている、または活用されてきた支援関係を見直したいと考えた。

II. 研究の方法

仲間支援に関する日本国内の研究はまだ少なく、実践報告が中心である。国内の資料に関しては、日本学校教育相談学会や教育心理学会及びその他の主要学会誌を中心に文献検索を行った。実践研究論文においては、ERIC(Educational Resource Information Center)およびPsycLITを海外の資料の検索媒体とし

て、データ検索を行った。また、研究報告や論文に加え、実践報告や実践マニュアル等も研究対象とした。

表1 調査された文献

	調査された実践的研究の概要	調査された実践用マニュアル
日本の資料	日本の先行的実践事例—13編	日本の先行的なマニュアル—2編
海外の資料	海外の実践研究事例—35編	海外の実践用マニュアル—16編

III. 人間関係と、仲間支援の概念的整理

仲間支援には様々な方法があり、またそれを表わす用語も数多い。この項において、まずそれらの概念の定義と整理を行い、それぞれの役割を確認する。

ピア

ピアは、(年齢・地位・能力などが)同等の者；仲間・同輩と訳され、ラテン語で「等しい、似た」の意味の“pār”に由来する。英語の“pair, par”もこの語源による。

仲間支援

仲間支援は、「仲間たちがお互いを慰めたり、なだめたり、友情を与えあったりする能力を、疎遠になった個人間の和解や葛藤の調停といった仕事に活かしてゆこうとする系統だった動き (Cowie & Sharp, 1997, P.15)」を指すとされ、日本語でも外来語でも様々な表現が使用されている。2000年1月に行われ

た国立教育研究所による「生徒指導国際フォーラム」で示された見解は、ピアサポートを仲間支援の包括的用語とし、他の用語はその下位分類とするものであった。よって、ピアヘルピング、ピアメディエーション、ピアファシリテーション、ピアカウンセリング、ピアチューター、ピアエデュケーション(Carr, 1994)などはそうした個々の役割に沿った名称の例と考えられる。

本研究は「ピアサポート」を、仲間による対人関係を利用した支援活動の総称であると考え、まず、仲間支援についての、様々な定義を以下にまとめる。

American School Counselor Association(1999)は、仲間支援を“Peer Helping”とし、非専門家による対人的な支援行動で、支援対象の人数や活動の種類によって役割・機能・責任範囲を区別しており、Kilgariffら(1999)、Beitel(1997)らの考え方も共通している。

有元(1998)によると、ピアサポートは、いじめや暴力の解消に役立つ介入的活動であり、コミュニケーション技能の訓練を受けた子どもたちが、様々な問題や悩みを抱えた者を支援するための活動の総称であるとしている。また、森川(2000)も、トレーニングを受けた子どもが周囲の子どもたちを支援することの効果が高く評価しており、高村(1999)も学校保健の領域からそれを支持している。一方、滝(2000a)は、ピアサポートプログラムとして、ゲームやロールプレイによってまず全体の雰囲気向上させ、相互支援力を高めることが、子ども同士が支えあう関係をつくるとしている。

心理教育的にみて、「ピアサポート」を仲間支援の包括的な用語と捉えると、「ソーシャルサポート」という用語との類似に気づく。これは主に非職業的援助とされ、学校でのカウンセラーや教諭のように、専門的役割として援助をする関係とは異なる(石隈, 1999)。ピアサポートは、そうしたソーシャルサポートと同様に非専門家によって行われる支援であり、広義においてはその一形態であると考えられよう。しかし、ピアサポートはいずれの定義によっても、ある一定の構造化された枠組を持っているという点でソーシャルサポートの中でも特化された活動といえることができ、専門的な役割のスタッフだけでは届かない、子どもの心の細部に及んで、即時的で予防的な分野での支援をする。

IV. ピアサポートの歴史

仲間支援は、欧米で、約40年前に方法論が考案され、以来、各分野で効果を上げている(Thompson, 1991)。仲間支援の分野は、障害者福祉や少数民族支援などにも活用されるなど多岐にわたる。教育分野において、仲間支援の歴史は、紀元1世紀にまでその起源をたどることができるとも言え(McManus, 1984)、イギリスのランカスターやアメリカの早期の学校教育では、先輩が後輩の生活や学習の世話をする形態がみられた。

また、仲間支援を活用する考え方が、1904年にアメリカのニューヨークで非行少年に対する支援として用いられた。このプログラムは、非行少年に対し、同世代の青年が友だちとして支援し、更正を支えながら自らも成長していくボランティア運動である。発生当初の、個人的な更正援助から、1909年には法人組織としてアメリカ全土に広げられた。このプログラムは日本へも紹介され、戦後の混乱期に、非行に走る若い世代への社会援助として1947年には日本BBS連盟が設立され、非行少年のメンタルフレンドのプログラムとして定着している。以来連盟では活動を続け、2001年現在でも約6,500名の会員が①友達活動、②非行防止活動、③研鑽活動の3つの柱で活動を行っている。

そうした福祉領域の状況を背景に、ピアサポートが仲間支援のプログラムとして教育分野で初期に実践されたのは、1965年の“Big Brother-Big Sister Program in a high school”からである(Vassos, 1971)。それと同時期に“The Peer Influence Model”によって仲間の影響を肯定的に活用しようとする実践研究プログラム¹がVriendによって1969年に示された。またそれに前後して、Murry(1972)は大学で学生間のAdvising Program²への活用を試みた。Rockwell & Dustin(1979)によると、その後、1975年に初期のピアカウンセリングのハンドブックが発刊された(Samuels & Samuels)、アメリカ国内で拡大した。そして、Carr(1980)の、より詳細なハンドブックがカ

¹ アメリカのVriendによって、高校で実践的に研究されたプログラムで、生徒と彼らが持つ「他の生徒を援助する能力」を学校での教育活動に活用していかうとするものである。学校現場での教科教育活動と生徒間の交流活動に活用されている。

² Murryによる、Kansas State Universityにおける大学生の相談傾向の調査。担当大学教育を割り振られた大学生の集団より、担当メンターとして上級生を割り振られた大学生の集団の方が、被相談者の満足度が有意に高かった。

ナダで発刊され、一層発展した。なお仲間支援の歴史は、資料2にまとめてある。

V. 現在までの教育現場でのピアサポートのながれ

学校現場での具体的な仲間支援は、初期には“Student Advising”という名称で呼ばれる学習支援と新入生の学校適応のための支援がサービスの主流であった。のちにピアカウンセリングが中心的な用語となったが、専門性を持つ“カウンセラー”と“ピアカウンセラー”との役割の面での混同を回避しようとする動きから、アメリカを中心に“Professional Counseling”に対して、“Peer Helping”などの名称で仲間支援をはっきりと区別しようとする動きがでてきた。Deffenbaugh & Hutchinson (1993)は、「ピアヘルパーはどんな状況にあってもカウンセラーと呼ばれるべきではない(p.10)」と強調している。仲間支援でカウンセリング的技法を使う生徒は、その役目が、共感的な聞き手であり、専門家へその生徒を委託する者という立場を超えて相談を行うべきでないことを、共通理解しておく必要があるというのである。その後1990年代に入るとアメリカでは主に“Peer Helping,”カナダやヨーロッパでは主に“Peer Support”とするようになってきた。

その援助の内容も、社会的な必要性にあわせて、各種の個別プログラムがつくられてきた。近年になって、そうした歴史的な経緯をまとめ、先行例を紹介した研究も発表されている。(Cowie & Sharp, 1993)

欧米をはじめとした世界の各地で、この仲間支援の活動が行われており、それらと日本のピアサポートを重ねて考える向きもあるが、日本の学校現場で利用できる仲間関係のあり方を探ることが重要であろう。

VI. ピアサポートプログラム

(1) ピアサポートプログラムの機能

ピアサポートプログラムの実践活動(サービス)を分類すると、いくつかの項目によって分けられる。例を挙げると、そのサービス内容によるもの、サービスの形態によるもの、サービスの方法によるものなどがある。

滝(2000a)による、ピアサポート内容の5分類

- ①相談をベースとした活動
- ②仲裁—もめごと解決
- ③仲間づくり—(バディ—二人組—をつくる、集ま

る場所を設ける、電話で相談を受ける)

- ④学習の中で—仲間同士の学び合い、教え合い
指導・助言—上級生による指導・助言

Cowie & Sharp (1996)による3分類

- ①カウンセリングアプローチ

- ②葛藤解決

- ③友達づくり

有元(1998)による、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの活動を整理した仲間支援の役割分類

- ①相談活動(ピアカウンセリング)

- ②ピアミディエーション(調停)

- ③ビフレンディング(悩める者のよき隣人になる)

- ④リスニングサービス(悩みの傾聴に制限した支援)

Myrick & Sorenson (1997)のピアサポートの役割分類

- ①Special friend(特別な友達)

- ②Tutor(チューター/勉強を教えてもらえる人)

- ③Assistant(アシスタント)

- ④Small group leader(小グループのリーダー)

これらを統合すると、資料1に参照の7類型になり、それぞれの特徴を整理すると下記ようになる。

相談活動:

訓練を受けた仲間サポーターが、問題を抱えた生徒の相談にのるものである。たとえば、いじめで悩んでいる生徒が、傾聴訓練などの基礎的なトレーニングを受けた生徒に相談をし、共感的に聞いてもらえることで勇気づけられ、学校のスタッフもスーパージョーンを通じて必要に応じた対応を行う場合がそれである。

葛藤調停:

Peer Mediation や Conflict Resolution ともいわれているものである。それぞれに細かな差異はあるが、主に問題を抱えた生徒同士の2者関係に、仲裁と傾聴の訓練を受けた生徒が、多くの場合、定められた手順に従って互いの話を聴き、両者が納得できる解決方法を探る支援をするものである。Brown (1999)は、その内容を分類し、1)Negotiation, 2)Mediation, 3)Anger Management の3種類に分けられると述べている。話し合いが成立すると、それ以後お互いを否定するような関わりをしないという「約束」が交わされることもあり、とても契約的な関係であるといえる。

コンフリクトマネージャーやピアミディエーターは、明確な役割を持った立場であるので、このプロ

グラムでは通常、明確なマニュアルを持ち、手順を復唱し合いながら問題解決をはかる。特に低い学年では、公平性を保つためにも複数の児童が一つのケースにあたることが多く、副次的な利益として、葛藤やもめごとを起こしやすい児童・生徒を支援者にする事で、彼ら自身によるもめごとの件数も軽減すると考えられている。(Meecham, School Counselor, Roseland Elementary School, personal communication, Mar.5,1998)

仲間づくり (居場所の保障) :

友達でいること。その相手がいることで、学校などでの自分の居場所を実感できる状況を保障する。学校に新入生が入ってきたときに、学校を案内したり、新入生オリエンテーションの援助をしたりするのは、具体的なプログラムに基づく支援である。一方、何か困った問題を抱えていたり、つらい思いをしている仲間に対して、相手の立場に立ってさりげなく必要な支援をするための感覚を育成する場合もある。

(専門家の)アシスタント :

主に、学校などの専門のスタッフが生徒の支援をする補助的な役割である。例えば、相談室へ来談者を呼び出す連絡係であったり、集団での活動で、スクールカウンセラーや教師の補助であったり、専門のスタッフの指示によって、行動が決まる。他の活動に比べて、間接的な要素を多く含む。

学習支援 :

仲間同士の教え合いである。学校で学ぶ内容に限らず、様々なクラブ活動などでも、大人から直接学ぶのではなく、既に習得できた生徒がまだ習得できていない他の生徒に伝達することで、助け合い、学び合うことができ、共に支える関係をつくったり、教える側の生徒の自己有能感を高めることにも効果を発揮する。

(仲間としての)指導・助言 :

全くの「よこ関係」というよりは、斜めの関係といえる。上級生や部活動の先輩からの助言・アドバイスが中心である。他にも、喫煙の害や交通違反の危険性などを生徒の立場で教育していくものも含まれる。

グループリーダー :

専門スタッフに指導されて、数人ずつに分かれたグループのリーダーになったり、グループの中でのディスカッションで問題提起したりする活動。クラスでのガイダンスや研修などで、構成的なグループ

活動を行う際に、グループ活動が活性化するように支援する。

こうした仲間支援の力を利用した活動が、実践現場の様々な場面で応用されている。これらの類型は、状況に合わせて複合的に用いられる場合もある。

(2) 様々な仲間支援の分類

ピアサポートの取り組みは、欧米をその発端として、様々な国で取り入れられ、各方面で活用されている。カナダのピアサポートの先駆的な機関の Peer Resources は、その情報を以下のように整理している。

- 1) 地域別のピアサポート機関 (都市, 州・県, 国等)
- 2) 教育現場でのピアサポート機関 (小・中・高等学校)
- 3) 教育現場でのピアサポート機関 (大学)
- 4) 成人社会向けピアサポート機関
- 5) 職場・組合・産業対象のピアサポート機関
- 6) 青年社会向けピアサポート機関
- 7) ピアサポート訓練とコンサルティング機関
- 8) その他, 情報源の提供を行う機関

これらの分類は、ピアサポートが、その活用の分野によって異なり、実践の現場で、各利用者が、仲間関係を創造的に利用してきたことがうかがえる。

次に、収集されたピアサポート関連の文献から、その初期から現在までの仲間支援の活動内容を振り返る。ピアサポートでは、そのサービスの役割、サービス形態、サービス方法、サービス対象が多種多様であり、サポーター・ユーザー関係もその実践形態によって応用的に用いられていることが示唆されていた。以下にその分類を項目別に示す。

◎サービスの役割によるもの

- ピアカウンセラー (カウンセリング的役割)
- レイカウンセラー (カウンセリング的役割)
- ピアメディエーター (調停)
- コンフリクトマネージャー (葛藤解決)
- バディ (友達づくり)
- ピアチューター (教育的な支援)
- メンター (先輩的な役割)
- ピアアシスタント

ピアサポートの支援内容によって、支援する生徒がどのような役割を持つかは異なる。ピアカウンセラーは、傾聴技法中心に対象となる生徒と関わるもので、アメリカの高校などで「ピアヘルパー」の任務 (National Peer Helpers Association, 1996) やイギリスのカウンセラーの例 (Cowie&Sharp,1996) にある

ように、役割とその限界が明示されている。また日本の先駆的な例では、横浜市立錦台中学校のピアサポートプログラム（メンタルフレンド）や同市立本郷中学校および前橋市鎌倉中学校の実践活動がこの範疇にはいる。

◎ ピアサポートの構造—サービス形態によるもの

- 1対1のカウンセリング的活動
- グループ（グループカウンセリング等）
- 学級

ピアサポート活動の形態によって、1対1の最小人数から学級・学校やコミュニティも含めたサービスもピアサポートプログラムの関与する範囲となり得る。従来からの欧米式のスクールカウンセラーが監督するピアサポートプログラムは、1対1の対面式が多い。学校によっては支援する生徒の力量を考慮して、2名単位で支援にあたらせている場合もあるが、いずれにしても個に対する支援である。また、グループカウンセリングのファシリテーターとして、その活動の体験者が、教師やスクールカウンセラーの監督のもとにプログラムに関わる例もみられる。それに対して日本的なのは、学級等の雰囲気づくりに貢献するものである。

サービス形態が大きくなるとまわりになるにつれ、支援する側の役割指向性が低くなる傾向があるようである。

◎ ピアサポートの構造—サービス方法によるもの

- 対面式—希望者が、相談・バディなどを申し込む。
（所定の申し込み用紙を利用するなど）
- 電話—所定の電話番号に連絡し、電話がつながった相手に相談をする。
- 手紙などの文書—所定の用紙に相談内容を記入し窓口などに提出。

ピアサポートの方法に関しては、対面式が最も多い。支援関係においては、その単位がより個人的な関係になるにつれ、誰が支援者であるかが支援の効果に大きく関与してくる。いわゆる支援者と被支援者の組み合わせは、各機関ともに配慮しているところである。

他に電話や手紙なども活用されている。特に、自殺予防やアルコール依存回避などを目的とした危機介入的な支援場面においては、即時性を重視する必要があり、電話やインターネットなどを活用したプログラムも利用されている。例えば、岡山県の「子どもほっとライン」（岡山県教育委員会）などは、大学生が中高校生までの児童生徒を電話とEメールで

支援するという、斜め関係のピアサポートが活用されている例である。

◎ ピアサポートの構造—サポーター／ユーザー関係

- 平行関係（全く仲間同士）
- 斜め関係（年齢が近いが、同年齢ではない者）
（先輩と後輩、新生と在校生、高校生と中学生、大学生と中・高校生等。Ct. 縦関係：先生・カウンセラーと生徒、保護者と子供）

「ピアサポート」とされる支援方法の中では、サポーターとユーザーが、必ずしも同じ校種に所属する者同士でないことがいくつかの例から示唆されている（例えば Dearden, 1998）。それらは、縦関係の例にあるような完全な師弟関係や専門家ではないが、ユーザーが抱える課題に関して、すでに経験し、克服している年代であることの信頼感や安心感が効果的に利用されているものといえる。加えて、上下関係がより強く残っている日本の縦社会においては、サポーターがユーザーと同じ立場であるよりは、少し年齢や成長の段階において上であった方が受け入れられやすい背景があるのではないだろうか。役割によって立場が保持されている欧米との違いはここにもあるといえよう。

ピアサポート対象

ピアサポート活動の対象となる主な事柄は、以下に示される。場合によっては、「セルフヘルプ(自助)グループ」として、同様な問題を抱える者同士が支え合うことに焦点を当てているが、ピアサポート関係にあるというには、そうした中でもサポーターがオリエンテーションを受け、何らかの役割意識を持ってユーザーの支援をすることが必要といえるであろう。

- 障害者の自立支援
- GLBT（同性愛、性転換）経験者の支援
- 学習支援（大学や中等教育において）
- HIV感染者の支援
- ガン患者の支援
- 高齢者の支援
- 自殺企図者への支援

ピアサポートの理論

ピアサポートの理論化においては、以下の3つがある。

- 学習理論によるもの
- 発達最近接領域
- 対象関係学派によるもの

有元(1998)は、ピアサポートの基礎理論として、

Engestrom の学習の拡張理論と、Lave と Wenger の状況的学習理論を挙げている。状況的学習理論とは、「個々人の心や頭脳の中だけで行われることではなく、共同体に他者とともに協同的に参加する実践的な活動の過程で行われるべきであり、知識を注入することに終わる学習ではなく、全人格的に成熟することを旨とする総合的な学習でなければならない(p.4)」というものである。つまり、子どもたちが実際の人間関係の中で、支援される側も支援する側も初めて人との関わり方を学ぶことができるということであろう。

また、高橋(1997)は、ピアサポートが、Vygotsky のいう、「発達の最近接領域 (p.204)」にかかわる活動であると主張している。最近接領域とは、子供が、一人だけで問題を解決する実際の発達段階と、大人の助言や、より優れた友達との協力によって、問題を解決する潜在的な発達段階間の距離のことである。言い換えると、子供が、周囲との関係性の中で、より容易に知識を獲得できるということであると推察される。

Beitel(1997)によれば、英国の精神分析家である Winnicott の対象関係学派の考え方がピアサポートの基礎にあり、サポーターは”Need-meeting transitional object”であるという。Beitel は、Murray の分析を紹介し、「移行現象を被支援者－支援者の関係にあてはめると、支援者の存在は、被支援者にとって現実と理想の中間的な立場になる。そこで主体的な観点と相対的な観点との交流を被支援者に認識させる役割が、移行対象としての支援者の存在である(1974)」としている。

これらの理論的背景は、それぞれの持つピアサポートの概念によって異なり、この点からもピアサポートが数多くの側面と役割を持つことを示唆されている。

Ⅶ. 日本でのピアサポートの現状

1990年代に入った時点では、ほとんど実践例がなかった日本でのピアサポートやそれに関連する取り組みは、現在では、新規実施団体が年を追って増えている。その対象や取り組みも多彩になり、また、海外のプログラムを直輸入した形態のものから、日本式に応用されたものまで、より多様になっている。

その中で、最も早かったのは、障害者福祉の分野であろう。障害を持った市民による自立生活 (Independent Living) (ニノミヤ、1992) という社会

運動を中心に発展してきた。中でも特徴的なのは、医療・保健・福祉の専門家中心の支援とは対照的に、障害を持った市民が、自分たちを一般市民としてとらえ、消費者運動・草の根運動という立場から推進してきたことである。

教育の分野にピアサポートが導入されたのは、90年代に入ってしばらく後であるが、仲間関係を支援の軸にした手法は、各教育者がクラスの友人を支援者として欠席児童の家庭を訪問させるなどして、活用してきた方法であろう。しかし、それを体系的に取り上げて実施したものは、1992年に大分県教育センター研究紀要として発表された「ピアグループ活動」が最も早期のものではないだろうか。この活動においては、「集団の自発性」を育てることを主目的にしており、仲間同士の連帯感・呼びかけが促進されるプログラムである。

それ以降、日本のピアサポートに関する実践活動が単発的に展開していった。例えば、体系的なピアサポート活動において、学校単位で取り組んだ例としては、横浜市立錦台中学校での活動が挙げられる。この活動の初期の時点では、「生徒いじめ相談」として、いじめを撲滅する目標を掲げて取り組まれた。生徒会が中心となり、いじめをなくそうと連携活動をしている教職員の姿から、「生徒として何かできることがあれば」という自発的な意図で始められた活動である(境、1996)。

この頃には、海外のピアサポート活動を指導したり参加したりする人々との交流も盛んに行われ始めた。日本学校教育相談学会や、日本心理臨床学会などの学会においても、ピアサポートがワークショップなどの形態で取り入れられ、ピアサポート活動のトレーナーなどからの指導も受けられる体制が整ってきた。現在は、すでに試行的に始められているピアサポートプログラムにおいては、現場に定着する内容への脱皮を目指している。個々の現場に即したプログラムを開発していく段階にあるようである。そうした多様な取り組みの、具体的な役割や効果について見ていく。

Ⅷ. ピアサポートの効果

ピアサポートは、支援する側にもされる側にも、心理面、学習面、進路面などにおいて、様々な効果を及ぼすことが、多くの文献から示されている。その効果をとらえる際に、大まかに3つの観点(直接的効果、副次的効果、およびシステムとしての効果)

からみることとする。

例えば、Gerber & Terry-Day(1999)は、ピア調停活動の直接的効果として、「学校における暴力や犯罪の軽減」がみられたと示している。副次的効果としては、ピア調停活動において、関与者の自己有能感、出席率の向上、リーダー意識と問題解決能力の向上を挙げている。

高村(1999)は、性教育における支援の中で、直接的効果として、性に対する正しい知識が高まったこと、明るく性をとらえられるようになったこと、及び、避妊も含めた賢明な性の意思決定ができるようになったこと(Pp.133-134)を効果としてあげている。一方で、副次的に、将来の人生設計を考える始める傾向も指摘している。

Fielding, Pili & Chambliss(1998)は、ピアサポートの直接的効果として、生徒たちが容易に感情を表現し、自分の怒りへの好ましい対処方法を学ぶことができ、多くの者に信頼されている支援者が彼らの問題をともに抱えることで、安心感を提供できるとしている。また、その副次的効果を、自分への信頼感を高めること、非暴力的で互いを尊重し合う交流の方法を学ぶこと、そして他の人々(非支援者)が自助力をつけることであるとしている。

また、他にも、学力の向上、非暴力的なコミュニケーション能力の獲得、発展的な問題解決の方法の習得(Hessler, Hollis & Crowe, 1998)、自分の価値の確認、他の人を支援する力の習得、支援をしている人に対する感謝、自分、他人、学校、地域に対する態度の向上、自己決定力の向上、生徒間の対人関係能力の向上(Scarborough, 1997)が効果としてあげられている。また、Philadelphia Peer Helper Associationは、薬物乱用の防止、社会的・情緒的な成長のために好ましい土壌づくりなどを効果として示したと紹介されている(Fielding, Pili & Chambliss, 1998)。

こうした効果に加えて、スクールカウンセリングの支援範囲を拡大し、裾野に向けて押し広げる(ASCA, 1999)ために、学校の機能にかかわる効果が示されている。例えば、自殺企図やその他の危機状態に陥っている生徒の早期把握と、専門スタッフへの委託(Fielding, Pili & Chambliss, 1998)、支援活動による危機介入の必要性の軽減(Kilgariff, Solomon, Zanotti & Chambliss, 1999)、教師の負担軽減と学力補充への力の集中、また、専門スタッフだけでは背負いきれない直接的サービスの拡大や、既存の問題の

早期把握、情報伝達の活性化(Schumidt, 1996)等が挙げられる。

これらの先行的な状況の把握をふまえて、日本の現状に合ったピアサポートプログラムを実践する必要があると考えられる。ピアサポートトレーニングにも配慮する必要がある、慣習的に行なってきた仲間支援にとらわれず、現場のニーズと適合した活動でなければならない。

IX. 考察

仲間関係は生徒の様々な成長を促すことができ、特に Kristel と Young(1996)は、アメリカの典型的な郊外型高等学校の生徒たちが抱える問題が①学業成果、②ストレス、③薬物使用、④友人関係、⑤家族問題の順であるとした上で、それらに対処する支援を友人に求める可能性が高いことを実証している。生徒らは、仲間によって支えられることを知っており、それを十分活用できる者ほど、支援の糸口を多く持つといえよう。

アメリカの中等教育では、Human Service(人間支援)分野の充実を目指し、その構成員として、スクールカウンセラー、スクールサイコロジスト及びスクールソーシャルワーカーの配置が各学区の中で義務づけられている。そうした背景にもかかわらず、多くの研究者が指摘するように(Murry, 1972, Carr, 1980, Kilgariff, et al., 1999)、子どもたち自身は、支援を周囲の大人でなく、まず仲間に対して求める。このことは、日本の高校生たちも欧米と同様であると考えられる。

Cowie & Sharp(1997)は、仲間関係を、若者たちにとって大変大切なもので、将来的に、その人の成人期にも影響を及ぼすと述べている。特に思春期の子どもたちにとって「仲間」との関係は重要であり、ピア・プレッシャー(仲間との同調圧力)も彼らの行動に大きな影響を与える(諸富, 1999)。ピアサポートは、そうしたピアプレッシャーさえも、開発的に活用できるのではないかと諸富は指摘している。

その一方で、日本の社会は、そうしたピアサポートが実践されている欧米とは多分に異なっている。鍾(1990)は、日本人のアイデンティティを欧米人のそれと比較する際に、「他人と自分の区別の曖昧さ」を指摘している。相手と自分がある「場」の性質によって人間関係も異なり、相対的な「わたしとあなた」は存在しても、絶対的な「わたし」が存在しにくいのである。その社会でのピアサポートは、欧米

のそれと全く同じような効果を期待できるものではない。例えば、サポーターとユーザーが支援という「場」を共有する中で、過度の同一化によってサポーターが心理的負担を抱えこみやすくなることはその一例である（西山，2001）。

学校で生徒同士の支援プログラムが正しく導入され、生徒たちの「支援を仲間に求める」という既存の傾向やその問題点を十分にふまえてプログラムを運用するとき、ピアサポートは、最も充実した支援方法となる。

引用・参考文献

安達輝久・佐々木正弘 1992 登校拒否児ピアグループ活動—ポランの広場の指導を通して 大分県教育センター研究紀要 第23集 Pp.113-132

American School Counselor Association, Position Statement

<http://www.schoolcounselor.org-peer.pdf>

有元秀文 1998 いじめや暴力を解消するためのピアサポートの学習 国立教育研究所 研究集録 37号 Pp.1-16

Beitel, M. Nuances before dinner: Exploring the relationship between peer counselors and delinquent adolescence. *ADOLESCENCE, Fall 1997, 32, 127, 579-591*

Carr, R. (1994) "Peer helping in Canada." *Peer Counseling Journal, 11(1), 6-9.*

Carr, R. (1980) "Peer Counseling Starter Kit" Canadian Cataloguing in Publication Data, Victoria, British Columbia.

コウィーH・シャープ S. 高橋通子(訳) 1996 学校でのピア・カウンセリング—いじめ問題の解決に向けて (Cowie, H. & Sharp, S. *Peer counseling in schools—a time to listen—* London: D. Fulton Publishers.).

Dearden, J. 1998. Cross-age peer mentoring in action. The process and outcomes. *Educational Psychology in Practice 13, 4, 251.*

Deffenbaugh, K. B. & Hutchinson, R. L. 1993 Peer Assistance Programs in the Schools: Some legal and ethical issues. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 366881)

Fielding, S., Pili, C. & Chambliss, C. Promoting

awareness of a high school peer helping program, (Ursinus College) (ERIC Document Reproduction Service No. ED419192)

Gerber, S. Ph.D. & Terry-Day, B. 1999 *Does peer mediation really work?* Professional School Counseling, American School Counselor Association 2, 169-170.

Goldberg, P. 1994 *SPARK peer helper program, 1993-1994. OER Report*, New York City Board of Education.

Hessler, R.M., Hollis, S. & Crowe, C. 1998. Peer mediation: A qualitative study of youthful frames of power and influence. *Mediation Quarterly, 15, 3*

石隈利紀 1999 誠信書房 18-19, 130-132

Kilgariff, L., Solomon, M., Zanotti, M. & Chambliss, C. 1999. High school peer helping: A program evaluation (ERIC Document Reproduction Service No. ED426319)

国立教育研究所 2000 生徒指導国際フォーラム 2000 発表資料

Kristel, O., Young, J., & Chambliss, C. 1997. *High school students' perceptions of adolescent problems.* (ERIC Document Reproduction Service No. 407629)

Kristel, O.V., Fielding, S., Chambliss, C. *An outcome assessment of a high school peer helpers program.* (ERIC Document Reproduction Service No. ED410477)

McManus, J. 1984. A model for school/community interventions with high school ~ student paraprofessionals (proceedings of the conference).

文部省中央教育審議会 1998 「新しい時代を拓く心を育てるために」—次世代を育てる心を失う危機—答申

<http://www.monbu.go.jp/singi/cyukyo/00000249>

Morey, R.E., Miller, C.D., Rosen, L.A. & Fulton, T. 1993 Highschool peer counseling: relationship between student satisfaction and peer counselors' style of helping *The School Counselor, 40* 293-301.

森川澄男 2000 ピア・サポート活動(中学校) 現代のエスプリ別冊 臨床心理士によるスクールカウンセラー Pp.149-161, 153-154

森田洋司 1999 「いじめ」予防と対応の新しい視点—豊かな人間関係づくりへの発想の転換 最新「いじめ」対策ハンドブック 児童心理 6月号 臨時増刊 金子書房 Pp.9-10, 81

- 諸富祥彦 1999 学校現場で使えるカウンセリング
テクニック (上) 誠信書房 p.206
- Murray, J.P. 1972. The comparative effectiveness of
student-to-student and faculty advising programs,
Journal of College Student Personnel, 13, Pp.562-566
- Myrick, R.D., Ph.D. & Sorenson, D.L., Ph.D. 1997 *PEER
HELPING: A Practical Guide*. Minneapolis, MN
Educational Media Corporation, 137-138.
- 日本BBS連盟ホームページ:
<http://www3.ocn.ne.jp/~bbsjapan>
- Ninomiya, H.A. 1992 ヒューマンケア協会 自立生
活への鍵—ピア・カウンセリングの研究 Pp.7-14
- 西山久子 2001 ピアサポートプログラム導入による
不登校回避の支援—スクールカウンセラー常駐
型高等学校における臨床的・実践的研究 岡山大
学教育学研究科学校教育臨床専攻修士論文 56-58
- Rockwell, L.K. Dustin, R. 1979. *Building a model for
training peer counselors* *The School Counselor*.
311-316.
- 境 光春 1996 子どもの権利条約が生きる学校づく
りと生徒会による『いじめ』克服の取り組み, い
じめ防止教育実践研究, 広島大学学校教育学部附
属教育実践総合センター1, Pp.89-98
- Scarborough, J.L. 1997 The SOS Club: A practical peer
helper program, *Professional School Counseling* 1,
p.25.
- Schumidt, J. 1996. *Counseling In Schools (Essential
Services and Comprehensive Programs)* second
edition. Allyn and Bacon, 114-115.
- 高橋通子 Cowie, H. & Sharp, S 1997 学校でのピ
アカウンセリング (あとがき) p.204 誠信書房
- 高村寿子編著 1999 性の自己決定能力を育てるピ
アカウンセリング. 日本性教育協会 Pp.?
- 滝 充 2000a ピア・サポートではじめる学校づくり
—中学校編 金子書房
- 滝 充 2000b 人間関係づくりの危機 週刊教育資料
Pp.11-13
- 田邊昭雄 1999 学校におけるピア・サポート—ピ
アカウンセリング的な援助の試み—高校教育展望
Pp.110-114
- 鐘幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社
- Thompson, J. 1991 *Establishing locus of control among
ninth graders: Using peer mentors to reduce student
disengagement, absenteeism, and failures*. Nova
State University
- Vassos, S.T. 1971 The utilization of peer influence *The
School Counselor* 209-214.
- Vriend, T.J. 1969 The peer influence model in
counseling *Educational Technology* 9, 3, 50-51

Title: The Background and Trend of Practical Peer Support and Peer-assisted Activities :the Beginning to Current
Tendency of Peer Support and Peer-assisted Activities

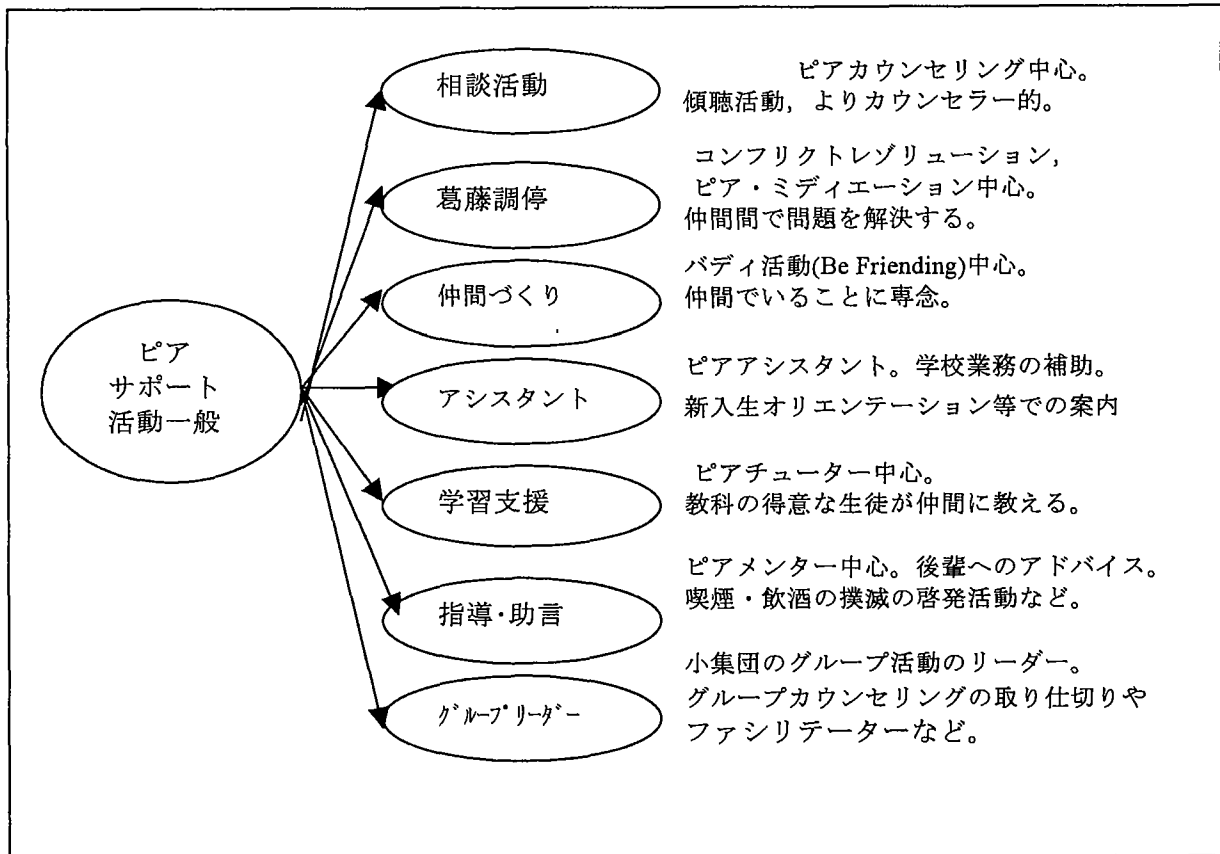
Hisako NISHIYAMA (Okayama Gakugeikan High School)

Tsutomu YAMAMOTO (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract : Our society has been utilizing students' support for other peers. Lately "Peer Support" has been introduced to our school environment together with some strategies, and the purpose of this movement is to make a good use of peer relationship. In the field of social work, people are using the function. Even traditionally people have been using this helping relationship among peers both in the fields of education and social work. They are summarized in 7 categories, such as counseling, mediation, be-friending, assistance, tutoring, advising and group-leading. When school utilizes students helping ability, people find useful and practical peer support program.

Keywords : peer-support, peer, peer-assist, peer-counseling, social support

資料1：ピアサポートの概念的整理



資料2：ピアサポートと仲間支援活動の歴史

年月	ピアサポート実施プログラム	ピアサポート研究	ピアサポートガイドブック・マニュアル	ピアサポート関連団体
1800'	ランカスターにおける高学年者による低学年者へのモニター制度実施(UK)			
1800'	早期のアメリカ教育での先輩による後輩の指導(US)			
1909	ニューヨークで Big Brother-Big Sister Program が非行防止を目的として制度化される(US)			BBS の公的組織がニューヨークで発足

1947	日本において戦後の混乱の中で、少年非行防止の目的で Big Brother-Big Sister Program 開始			日本BBS連盟発足。第2次大戦後の非行少年のメンタルフレンドとしての活動が最も多い。
1965	高校において Big Brother-Big Sister Program 開始 (US) (1971年に紹介)			
1969		Vriend による高校でのピア間による影響の研究(US)		
1972	Grape Vine Movement により思春期領域の保健と性教育にピアカウンセリングが導入される(UK)			
1972	大学での学生間アドバイス制度が始まる (US)	Murray,J.P.の大学アドバイスプログラムの研究実施		
1975			Samuels の "The Complete Handbook of Peer Counseling" 発刊(US)	
1976	Milwaukee 家族計画協会でのピアカウンセリング紹介(US)			
1977				WHO 思春期のヘルスニーズにピアカウンセリングプログラムの開発・導入の必要性を強調
1978			Hebeisen,A. による "Peer Program for Youth" 調査実施 (US)	
1979			Dustin らによりピアカウンセラートレーニング案作成される(US)	
1980		Carrによる生徒の同輩・友人依存傾向の研究 (CA)		
1984			McManus による高校での非専門援助職の調査研究 (US)	
1984		France によるキャリア発達におけるピアカウンセラーの研究 (CA)		

1884				National Association for Mediation in Ed.(全米教育ミディエーション協会)発足 (US)
1984				California Association of Peer Programs(カリフォルニアピアヘルパー協会)発足(US)
1986				The National Peer Helpers Association(アメリカピアヘルパー協会)発足(US)
1987			Cole によりピアカウンセリング用マニュアル"Kids Helping Kids"初版発刊(CA)	Peer Resources Inc, 発足(CA)
1987	ピアカウンセラー訓練プログラムが自殺軽減のために始められる(US)			
1989			ピアカウンセリング用マニュアル "Friends Helping Friends" の作成 (US)	
1990		Stamnus による高校でのピアカウンセリングプログラムの評価(US)	高校でのピアカウンセリング訓練のための指導書作成(US)	
1992	ピアカウンセリング制度 が薬物・飲酒防止プログラムとして(US)	North Forsyth 高校ピアカウンセリングプログラムの評価(US)		
1992	登校拒否児のピアグループ活動「ボランの広場」(大分県)			
1993				ヒューマンケア協会「ピア・カウンセリングガイドライン」発行
1993		高校でのピアアシスタンスプログラムの法的・倫理的な研究		
1994	コミュニティ主導による青少年支援のためのピアサポートプログラム実施(US)	ニューヨーク市教育委員会によるピアサポートプログラム報告		
1995	Perkiomen Valley ピアエデュケーションプログラム(95-97)実施(US)	高校におけるピアヘルパープログラムの訓練における成果		

		の研究		
1995	ヒューマンケア協会関西地区の震災被害者へピアカウンセラー派遣			
1995	横浜市立錦台中学校「生徒いじめ相談」を立ち上げる			
1996			Goodlad による国際ピアメンターのまとめ(UK)	
1997	前橋市立鎌倉中学校「ピアサポートプログラム」導入			
1998	急学防止プログラムでの異年齢間ピアメンタープログラムの実施(US)	Dearden,J. によるピアメンター活動の成果の分析		
1998	横浜市立本郷中学校「ピアサポート委員会」の活動開始			
1999				国立教育研究所「いじめ問題国際シンポジウム」にて豪州のピース・プログラムを紹介
1999	千葉県立津田沼高校ピアサポート試行プログラム開始(生徒・保護者対象)			
2000				国立教育研究所「生徒指導国際フォーラム2000」にて「日本のピアサポート」の概念規定が提示される
2001	岡山県立西大寺高等学校にてピアサポート活動の試行的実践プログラム開始	ピアサポートグループの実践研究		